

## 4・作業日報のデータベース化と共有—記録班の活動—

二神 葉子 東京文化財研究所 企画情報部 情報システム研究室長

### 1. 経緯

文化財レスキューの事務局の立ち上げとレスキュー活動の開始にあたり、参加している構成団体から活動の記録を作業日報（以下、日報）としてお送りいただくこととした。最古の日付は平成 23 年 4 月 13 日で、平成 25 年 3 月 28 日を最後に、899 件が記録されている。

### 2. 活動内容

日報には、日付、活動のテーマ、活動場所、参加者の氏名・所属、作業内容、報告者が記されている。備考欄には、レスキュー対象に関する所見や今後の予定等、上記以外の情報を記入する。日報の書式は各構成団体に Excel<sup>®</sup> ファイルで配布、日報は事務局にメールでお送りいただいたが、当初は、通信環境が良好でない被災地から携帯メールで作業内容が送られてきたり、記入した紙の FAX 送信・郵送や持参の場合もあった。日報の情報は、記録班が Filemaker Pro<sup>®</sup> で新たにデータベースを作成し、逐次入力を行い、PDF ファイルに書き出して週に 1 回程度関係者にメールで送付した。この作業は、5 名の構成員がシフトを組み週ごとに対応し、データベースは所内のネットワークハードディスクに置き編集、単一のデータベースで情報を管理した。当初はレスキュー現場に関する情報が非公開で、日報の共有先は限定的だったため、広報班が日報から活動記録を抜粋、ニュースレターとして主に構成団体に向けて送信した。日報の内容は日々さまざまで、1 日の参加者数が 30 名以上の日や、1 日に複数の現場作業に当たっている場合などもあり、しかも最も繁忙な時期には 1 日に 10 件の日報が届いていた。初動時は既製の入力項目では不都合な場合や、後の利用に不都合が生じるような場合が頻繁に発生し、記録班と関係者で協議を行いながらデータベースの修正を適宜行い、よりよく情報を蓄積できるよう心がけた。

日報の書式を作成する際に留意したのは、参加者があま

り負担なく書ける、という点であった。実際の活動記録は各作業の進行にも、後の分析にも重要なものであるが、日報作成が作業者にとって大きな負担とならないような形式とすべく協議と対応を重ねた。書式や内容に関する依頼は最低限にとどめた。箇条書きか文章か、各作業の開始・終了時刻の有無など、書式や内容の詳細さに若干のばらつきが生じたが、日報の公開が限定的で、他の日報が参照できない場合もありやむを得ない部分もある。参加者の所属も同一人物で異なる場合があったが、同じ方が異なる立場で活動に参加したり、災害対応で所属先の名称や所属先が変わったのも原因で、これも災害時の現象といえる。

ところで、平成 25 年 2 月 4 日の公開討論会で、国立民族学博物館の日高氏や兵庫県立美術館の江上氏は、筆者が日報作成を「余計な作業」と表現した点を取り上げる一方、作業の記録を残すことは専門家として当然で、文化財レスキューの一員として公式に活動している以上、日報作成は必須の重要な任務であると認識し、作成していたと話した。また全国美術館会議では、その日の作業の終了後すぐに日報を作成することが引継事項とされていたときいた。個人的には少し異なる反応も受けていたので、この話はとてもありがたかった。被災文化財の救出・移送や応急処置を終えてからの日報の作成は、参加者には負担だったかもしれない。しかし、広域の災害で活動場所も 90 か所を超える中、各現場が活動の記録を報告しなければ情報共有は不可能で、その役目を日報が果たすことができたと思う。

### 3. 今後の展望

日報作成や提出のしくみは、非常時であるにもかかわらず、参加者の熱意と記録班の工夫で初期の段階においてもうまく機能した。よりよい情報蓄積と利用のためには、全体的な管理統括が必要不可欠で、そのチェック機能を転記作業が果たしていたともいえる。最終的には記録班がまとめるので、日報はどんなファイル形式（あるいは紙）でもよい、という点は重要だったと思う。一方で、関連の画像

---

も所内全員と一部の所外関係者から集めているが、蓄積にあたり撮影者ごとのフォルダ分けという最低限の要望にとどめたことで、現状では、目的の画像が探しづらい状況が生じている。今後、撮影者・撮影日の情報により日報と関連付ける作業を行っていく。

日報は、文化財レスキュー活動の記録としてそれ自体貴重である。日報はすでにデータベース化しており、詳細な分析を通じて得られる各レスキュー対象や現場の参加者数、所要日数、作業内容やその工程等の具体的な情報から、将来の災害への備えの具体的なイメージを描けるだろう。日報が、予算も参加できる人材も限られる文化財防災・文化財レスキュー事業の効率的な運営に貢献することを期待する。